

象徴としての人間——文学から学知へ

3月の阪大セミナーは、浦井先生のお誘いを真に受け、去年大学でやった象徴詩の講義のダイジェスト版を用意して出かけたところ、会場に来てみると「討議の資料」が用意されており、いつの間にか「討議」せねばならぬ手筈になっておりました。いきなり方針を変更するわけにも参らず、最初の予定通り講演をして終えました。

お断りしておかねばなりません、一般的に言って文学は「討議」とは無縁の領域であります。あまつさえ、マラルメの象徴詩はほとんど理解すら拒絶している。詩人たちは自らが束の間の生涯において掴み得たと信じる秘密を言葉と目配せで伝えて行くのです。秘教的で、いわゆる学知とは真逆の営みと言ってもいい。そこに宗教との接点があります。

私にとって文学とは、そうしたものです。答えの出ない、深い霧のようにもやもやした象徴の森のなかで試行錯誤することは、思春期の青少年の教育に欠かせぬ知的訓練になると信じています。

とはいえ私は詩人ではなく、とくに自らを文学者ないし文学研究者と規定する者でもありません。象徴主義にたいする私の関心は一定の視座からのもので、そのかぎりでは討議に応じる用意があります。といいますか、むしろ私は象徴と交感という言葉で、学知一般を相手に対話を試みようとしてきた、と申してもいいのです。どういふことか、ごく手短かにご説明申し上げます。

ミシェル・フーコーが「人間の終焉」を華麗に説いたのは60年代のことですが、かれの著作を読んでも「終焉後」の人間がどうなるのか、さっぱり解らなかつた。また、フーコーは都合よく忘れていたようですが、すでに30年代にロシア人哲学者アレクサンドル・コジェーヴは「歴史の終焉」を説いていた。にもかかわらず、相も変わらず歴史は続いている。はたして歴史は終わるのか、それが終わるとして、その後の人間がどうなるのか、いっこうに定かでない。

フーコーやコジェーヴのような大仰な言葉こそ用いていませんが、近代的な人間の後の人間、歴史の後の歴史について考えていたのが、ベルクソンであり、またホワイトヘッドであったと私は見えています。そこにハイデガーやベンヤミンの名を加えてもいいかもしれません。かつて「人間」の名で呼ばれてきたもののイメージを、ベルクソンは「命と愛のエラン」に託して、ホワイトヘッドは「アクチュアル・エンティティ」という概念を介して語ったのだと。同様にハイデガーは「現存在」(ダーザイン)というジャーゴンを捏造したわけです。

現在私たちが生きている21世紀の世界資本主義状況において、人間は想像を超えた変容を遂げつつある。私たちは生物学的な意味での人間であり、哲学的な意味での主体であるばかりか、無数の政治的・権力的な網目の結び目の1つであり、多数多様な情報の受け手&送り手であります。

経済的な観点から言えば、すべての人間が消費者であり、幾分かは生産者であり、多くの人間が組織人であり、企業人であります。

さらに言えば、私たちは相も変わらず自然人であり、時に野生人でもあって、ほとんど原始人から進歩していないように思われることも甚だ多い。この多様性・多義性を哲学的なジャーゴンに頼ることなく可能なかぎりリアルに把握するにはどうすればいいか。

前世紀、旧来の哲学体系に飽き足らぬ人たちが展開したのが記号論で、パースの深遠な体系を始めとして、その試みには多種多彩なものがあります。ベルクソンやドゥルーズは、人間の文化や社会を論じるにあたり「記号」という概念を用いることがしばしばありました。その行き着くところは得てして概念主義であり、それがさらに進むと数理主義になるかもしれません。

私としては、この道を引き返した方がいいのではないかと思う。記号や数理に突出し、抽象化・概念化するのではなく、むしろその手前の具体性を大切にしたい。記号的・概念的な体系として固まる以前の曖昧模糊としたコミュニケーション過程を注視したい。

記号化・概念化される以前のところにありながら、実物や物質性そのものではない。決して自ら実体化されることなく、却って他を実体化させ、私たち個人の生や、社会全体を支配する力を持つ、そんな不可視のシステムをホワイトヘッドは「象徴作用」(シンボリズム)と呼びました。「アクチュアル・エンティティ」にしても、象徴作用の1つの表現と捉えることができます。ベルクソンの「命のエラン」「愛のエラン」も象徴作用の顕われと見なせる。

前世紀、こうした象徴作用を最も体系的に論じてみせたのがエルンスト・カッシーラーでしたが、そんな体系性が可能になったのは、かれがあくまでカント的図式に依拠していたからで、ホワイトヘッドの象徴作用はそんな堅苦しい図式から自由で、経験主義的かつプラグマティックな色合いが強い。そこに現代的な可能性があると云ってよい。

ホワイトヘッドの体系は思いがけぬ偶然性、あるいは悲劇的ですからある偶然性に開かれている。その意

味で経験論的で、それが弟子のラッセルともケインズとも違うところです。かれは形式化の限界につねに直面している。その臨界から一切の議論が導き出される。

象徴記号を前提とするのではなく、それが生成する過程を哲学的・原理的に追う。弟子のスーザン・ランガーのように安直な一般化に走らない。ホワイトヘッドにとって象徴はあくまで経験の場で創成される。それが生まれる場所に左右され、状況に左右され、時代に左右される。言語による概念化の手前で作動している。概念が時間や空間に縛られず普遍的だとすれば、象徴は時間と空間の限定を受け局在的なのです。

象徴と記号の大きく違う点は、前者が視覚性・映像性を前提とすることです。それはたんなる言葉ではなく、記号ではない。なるほどパースの記号概念は明らかに映像性を含みますが、これはかなり特異な記号理解だと思われます。一般的に言って、記号は言語&数理モデルで捉えられることが多い。それを論理的に洗練させるのが学術的営みだと思われている。そして、その意味での記号論の流行は長続きしませんでした。

ちなみに「アレゴリー」は映像的で、ベンヤミンはシンボルにたいしてアレゴリーの哲学を対置しました。この件はややくしくなるので、ここでは省きます。

さて、以上のような特異な意味での象徴概念の出所として1つはベルクソンがあるでしょうが、もっと広く、当時の哲学や科学哲学において「象徴」という言葉を用いる思潮があった。さかのぼれば、19世紀末のフランス象徴詩に行き着きます。

第二次世界大戦で、これらの思想的営為はほとんど根底から破壊されてしまいましたが、こうした前世紀の思想的営為の総体を甦らせつつ、21世紀の新しい人間像・社会像を構想し構築する。文学から学知へ。それが言ってみれば私の学問的野心であります。

**

以上は浦井先生宛てのメールでしたが、次に村田晴夫先生宛てに、よりホワイトヘッド『象徴作用』の文脈に即した内容のメールをお送りします。いささか話はテクニカルなものになります。